

表紙、裏表紙、編集後記、奥付

雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	53
発行年	2020-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/00020423

関西大学 東西学術研究所紀要

53

論説

- 日本における『家礼』式儒墓について
— 東アジア文化交渉の視点から (一) — 吾妻重二 (3)
 - 大安寺僧戒明が請来した唐代の宝誌像 西本昌弘 (41)
 - 開高健『日本三文オペラ』論
— 在日朝鮮人キムの役割の重要性 — 増田周子 (55)
 - 下村観山筆《大原御幸》について 村木桂子 (73)
 - 『新勅撰和歌集』除棄歌のゆくえ
— 『続後撰和歌集』の撰集から — 瀧倉朋世 (95)
- 研究ノート
- 石濱文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について 玄幸子 (117)

論説

- 清初扎薩克喇嘛制度的形成
— 从内外两库伦体制到多库伦体制 — 池尻阳子 (3)
 - Re-Examining Japanese Mythologies:
Why the *Nihon Shoki* has two books of myths but the *Kojiki* only one
..... ヴィットカンブ ローベルト F. (13)
 - 荒川+ギンズにおける「使用法」の使用法
— 「バランスを失う」ことと積極的受動態の構え — 小室弘毅 (41)
 - 長崎来航唐船主による書法受容の一形態 松浦章 (61)
 - 浅析《拜客訓示》中的耶稣會士行跡考 彭强 (83)
 - Robinson Crusoe* 的译本研究
— 以牛山良助版和英爲霖版为中心 李云 (107)
 - 南北戦争直後のアメリカから見た清日両国の使者
— 蒲安臣 (パーリンゲーム) 使節団と岩倉使節団をめぐる米紙の報道 —
..... 黄逸 (121)
 - 住友家の人々と泊園書院
— 『南汀遺稿』の考察を中心として — 横山俊一郎 (139)
 - 近世ベトナム北部地域における仏典刊行事業 宮嶋純子 (155)
 - ベトナム紅河デルタの専業村における家内工業の実態
— ハーナム省チュウ村のライスペーパーを事例に — 齋藤鮎子 (173)
- 資料紹介
- 昭和初期の子供向けの中国語教材の一端
— めんこ・かるた・新聞 氷野善寛 (209)
- 研究ノート
- 景観からみた大阪の街理解の方法
— 古地図アプリを用いて — 岡絵理子 (233)
 - 羅振玉と山本竟山の文人交流
— 書簡と筆談を中心に — 蘇浩 (251)

二〇二〇年四月

関西大学東西学術研究所

東西学術研究所紀要

第五十三輯

(二〇二〇年四月)

関西大学東西学術研究所

BULLETIN OF THE INSTITUTE OF ORIENTAL AND OCCIDENTAL STUDIES, KANSAI UNIVERSITY

No. 53

APRIL 2020

CONTENTS

Articles

- Jia-li* Style Confucian Tombs in Japan: A Study from the Perspective of Cultural Interaction in East Asia, Part I AZUMA Juji (3)
 - The image of Hoshi that Kaimyo—a Buddhist priest of Daian-ji Temple—brought to ancient Japan from Tang Dynasty China NISHIMOTO Masahiro (41)
 - Study of “Nihon Sanmon Opera” by Takeshi Kaikou:
The importance of the role of Korean Kim MASUDA Chikako (55)
 - A Study of Cloistered Emperor’s Visit to Ohara (Ohara Goko-zu)
by Shimomura Kanzan MURAKI Keiko (73)
 - The Whereabouts of the Wakas that were Removed from *Shinchokusenwakashū* TAKIKURA Tomoyo (95)
- Study Note
- A description of Dunhuang manuscripts research at London and Paris found in the letters held by the Ishihama Collection, Osaka University Library GEN Yukiko (117)

Articles

- Formation and implementation of the Jasak Lama system in the early Qing period IKEJIRI Yoko (3)
 - Re-Examining Japanese Mythologies:
Why the *Nihon Shoki* has two books of myths but the *Kojiki* only one WITTKAMP, Robert F. (13)
 - How to use “Directions for use” of Arakawa + Gins’ architectural works —“losing balance”and the bodily set of “Positive Passivity” KOMURO Hiroki (41)
 - A form of acceptance of calligraphy by a Nagasaki visiting Chinese Junk merchant during the Edo period MATSUURA Akira (61)
 - A brief analysis of the behavior of Jesuits in *Instruction pour les visites de Mandarins* PENG Qiang (83)
 - Comparing the Translations of *Robinson Crusoe* (J. D. Watson’s Edition) in Chinese and Japanese LI Yun (107)
 - The First Ambassadors of China and Japan to the United States around 1870 —The American Newspaper Reports on the Burlingame Mission and the Iwakura Mission Yi HUANG (121)
 - Sumitomo Family and the Hakuen Shoin, Focusing on *Nantei Ikō* YOKOYAMA Shunichiro (139)
 - Publishing project of Buddhist wooden block scriptures in Northern Vietnam in the early modern times MIYAJIMA Junko (155)
 - The Craft Villages of Rural Industry in Red River Delta, North Vietnam: A Case Study of Rice Paper Rural Industry in Cheu Village, Ha Nam Province SAITO Ayuko (173)
- Communications
- A part of Chinese teaching materials for children in the early Showa era —Menko, Karuta, and Newspaper HINO Yoshihiro (209)
- Study Notes
- How to understand Osaka city from the viewpoint of landscape —Using the old map application— OKA Eriko (233)
 - The Literati exchanges between Luo Zhenyu and Kyōzan Yamamoto: Centering on letters and written conversation SU Hao (251)

EDITED BY

THE INSTITUTE OF ORIENTAL AND
OCCIDENTAL STUDIES
KANSAI UNIVERSITY, OSAKA

編集後記

本年度の紀要には、多数の投稿論文の中から十九篇が採択され掲載された。年明けから流行が本格化したコロナウイルスのために、中国からの投稿では、インターネット障害によって校正作業が遅延し、編集作業に大きな影響が出た。コンピュータ社会の弱点の一端が表面化したわけだが、それでも諸外国とメールでやり取りできる体制は非常にありがたい。

メールと並んで、パソコンによる文章入力、執筆者の抵抗感を緩和し、論文が書き易くなったように思われる。もちろん、機械が文章を書いてくれるわけではないので、当然のことながら、内容が定まっていなければ、執筆は進まない。しかし、それでもパソコンによる文章化は、研究者の論文執筆を大いに有利にした。

今からおよそ半世紀前に、修士論文を万年筆による手書きで執筆し、文字を書き間違えるたびに原稿用紙を破り捨て、思わぬ手間がかかったため、提出の締め切り時間に2時間遅れ、留年となって、指導の先生に叱られた筆者にとっては、あの時にパソコンなどの機械があったなら、無事に2年間で修士（博士前期課程）を修了できていたのではないかと、という詮無い繰り言と溜息が漏れる。

ただ、問題と思われるのは、機械によつて、どこまでも簡単に、そして徹底的に文章の修正が可能となったために、多くの執筆者の文章が似てきたように感じるのは私だけだろうか。文体や論文構成などの形式も、多くがよく似ており、半世紀前の原稿用紙に手書きの原稿の方が、個性的で、文章にリズムがあったように思われる。この状況を見て、新しい時代の文体と形式が生まれたのだ、というのは正論かも

しれないが、人文科学の論文から「人間的なもの」が徐々に駆逐されていくようで悲しい。こうした感想を書くような老人は、黙って消えるべきだ、という天の声が聞こえてくると、なおさら悲しい。

今回も、限られた査読委員によつて、かなりの量の査読作業がなされたが、多忙な中、専門分野の異なる論文も多数査読していただいた先生方に、お詫びとともに感謝の気持ちを伝えたい。自己の専門とは異なる論文を読み、勉強になったと言っていただけの論文が、一体どれぐらいの数あったのか知りたいものである。そうした学問における越境の感覚が、研究の内容に深く反映されることを夢見て筆を置く。

(N.N.)

二〇二〇年四月一日発行

発行 © 関西大学東西学術研究所

所長 沈 国 威

〒五六四一八六八〇

大阪府吹田市山手町三丁目三番三五号

電話〇六一六三六八一〇六五三番

FAX〇六一六三三九一七七二番

編集者 関西大学東西学術研究所

編集委員長 中谷 伸 生

編集委員 内田 慶 市

近藤 昌 夫

印刷者 株式会社遊文舎